

## 長期ビジョン審議会 平成 28 年度総会 議事録概要

1 日 時：平成 29 年 3 月 15 日（水）10:00～12:00

2 場 所：兵庫県公館 大会議室

### 3 参加者

委員：足立委員、太田委員、大谷委員、大西委員、岡田委員、小倉委員、柏木委員、加藤委員（会長）、狩野委員、亀田委員、岸岡委員、北野委員、清原委員、草郷委員、香山委員、古武家委員、志智委員、瀬木委員、高橋委員、田中委員、玉田委員、陳委員、辻委員、突々委員、内藤委員、中沢委員、中村委員、中山委員、西山委員、能島委員、畑委員、服部委員、原委員、平田委員、堀委員、増田委員、三上委員、室委員、吉本委員、米山委員、和田委員

（40 名）

（代理出席）戸田委員（西岡代理）、登里委員（上坂代理）、

久元委員（天野代理）、吉富委員（李代理）（4 名）

合計 44 名

県側：井戸知事、金澤副知事、山口政策創生部長、坂本ビジョン局長、  
内堀ビジョン課長

### 4 内容

#### （1）議事

##### ○兵庫 2030 年の展望（仮称）の策定について

#### （2）委員からの発言・意見内容

##### ○和田委員

ビジョン委員会の活動の中でグローバル、多文化があるが、物見遊山や異国情緒という多文化共生ではなく、一緒に食事をする、宗教や文化の話を聞くとといった行動をさらに進めることが大切だと考えている。ビジョン委員会では、シナゴークやモスクに行く、ご馳走になる、サウジアラビアに遊びに来ないかという誘いを受けるといった突っ込んだ活動が神戸、兵庫県に住む我々にとって大事かと考えている。

## ○室委員

阪神南では、今後は高齢化になることから、元気な高齢者の支援による地域活性化を考えている。健康な高齢者の力を生かし、地域の自治の推進や地域活性化が図れる仕組みをつくる。例えば有償のボランティアで、年金プラスアルファを期待して活動する人の力を活用したい。コミュニティの活性化、世代間交流や地域のコミュニティづくりの充実を図るため、従来の考え方や価値観を打ち破っていく発想の転換、新しい動きを一人一人が展開することが重要である。自分たちが楽しいと思う、やりたいイベントをするのではなく、地域の人達が本当に必要としていることを正確に把握し、地域の人たちのためになることを、地域の人たちと一緒にアイデアを出し、協力しながら、継続的に取り込んでいくべきである。

若者の力を生かしたソーシャルビジネスに関し、若者の社会貢献がビジネスとして成立していないため、なかなか若者を地域に取り込むことができない。ビジネスになれば若者の目の色も変わっていくと思う。

都市部での農業を支えていく人が減少している。都市型農業を中心に、これから農業をどうしていくかを皆で考える場を設け、農業の6次産業化による幅広い事業展開を行い、若者を巻き込んでソーシャルビジネスを展開していくようにしたい。

## ○古武家委員

阪神北の夢会議で出てきた内容については、資料7を参照していただきたい。私から申し上げたいこととして、一つは、仕事に関わる環境問題の面から言うと、例えばエコとヘルス、健康のようなキーワードを結びつけた形での政策展開をお願いしたい。例えば、この付近では吹田市がエコメディカルシティの発展という形でやっている。ビジョン委員の議論の中でも、一つ一つを別々の政策ではなく、繋がりをつけた形で政策に展開してもらいたいという意見が出た。

もう一つはビジョン委員の資質の問題で、私もビジョン委員だが、これまでの7期まで、特に前期の中頃までは新しいビジョンをつくるために非常にアクティブに活動していたと聞いている。その後8期に入って少し活動が小ぶりがしている。そういう意味ではビジョン委員自身もアクティブに、今日のような問題を考えていきたい。

## ○高橋委員

東播磨は水辺・ものづくりのまちで生きるという理念のもと、それに連動しながら、4つの将来像に基づいて16のグループが活動している。資料7の東播磨の意見の最後の「交通ネットワークを整備し、産業や観光等の活性化」で、第1回まち・地域研究会の発言要旨にも書いてあるが、ネットワークにもっと県がコミットすべきということで、観光に関しても、互いに協力しながら取り組んでもらえたら良いとの意見が出ていた。

2030年の展望について、マイナスの面だけでなく、もっとプラスの意見もあると思う。

例えば小学生のトライやるや縁結びの出会いサポートセンターで少子化対策も描き、人口増も兼ねた取組をされている。

そういう中で、大人も子どももレッツトライやるということで「やってみなはれ兵庫県人」ということを提案したい。その具体的な例としては、150周年を迎えるにあたり、150個のギネスに挑戦という取組をしてはどうか。予算規模は1億6500万円。1件100万円、交通費等を入れて、110万円ぐらいを補助して、県全域で楽しい企画を練るという事業を実施すれば、世界で一番評価される県になると思う。また、高砂市の縁結び、但馬にはコウノトリもあるので、縁結びにもっと力を入れもらいたい。私の出身である高砂市に出先機関をつくり、そこを中心に発信していただきたい。

文化を大切に、ふるさとを愛する人が集うまちという基本理念を持ちたいと思っている。我がまち構想ということで、自分たちのまちを再発見し、自慢するお国自慢大会を県として150周年に向けて開催してもよいのではないかな。

「民間の発想は豊か」という文章がひと・暮らし研究会の発言要旨にあったが、ファブラボ高砂というものづくり工房が3月20日にオープンする。3Dプリンターやレーザーカッターを使う工房であり、県の補助、支援をいただいて、民間の発想でやっている。よろしければ、見に来ていただけたらうれしく思う。

## ○内藤委員

北播磨のビジョンの取組は資料を見ていただくとして、活動の過程で感じたことを、2点申し上げたい。

一つは先ほど生産年齢人口について、高齢者の定義を75歳以上とすれば人数が増えるという話があったが、90歳ぐらいまで生きられるとなると、40年ほど働いても、まだ30年以上残る。高齢者のライフスタイルは様々だが、これを個々人に任せるような時代ではなくなると思う。高齢者はこれまでよく働いたから自分の楽しみを追求したいと考えがちだが、そうでなく、次の世代のことを考えなければならない。そういうコンセンサスをつくり上げる必要があるのではないかと考えている。高齢者の労働力をどう使うかよりも、高齢者の自己実現を考える上で、生物の本来の姿である、次の世代を考えて社会と接点を持っていくというプランを考えなければいけない。家族機能が衰え、非正規の人が40%近くを占め、子どもが減っている状況で、大きな構造変化が起きている。こうした状況では、高齢者のあり方について研究する組織が必要なのではないかな。自分のことだけでなく、社会のこと、次の世代のことを考える高齢者でありたい。

二つ目はインバウンド観光についてである。北播磨はコメどころだが、このままでは農村が疲弊していってしまう。農村には様々な文化が残っており、北播磨はため池も多い。しかも京都、奈良にも、大阪、神戸にも近く、姫路城もある。そういう中で、どのようにしてインバウンド観光で人を呼び込むか。観光客の関心も大きく変わってきている。本来の日本的なものを求める人に、いなかを体験してもらいたい。そのためには、

観光バス2、3台で来て、2、3日は滞在してもらいたいような場所が必要。金融庁も地方創生にお金を出すという形で動いていると思うので、そういった公と結び合って、北播磨の良いところ、本来の日本の良いところを知ってもらえるようになればいい。観光を大きなビジネス、産業としてとらえ、その発展を図っていく道があるのではないかな。

最後になったが、夢や希望を持てる兵庫県、子供もそこで育てたいと思うような、そういうビジョンになればいいと考えている。

### ○柏木委員

中播磨の夢会議は、初めての試みとして小学生、中学生、高校生、大学生4つのグループに発表してもらい、その後はグループワークに参加してもらいたいという若い世代が関わる夢会議になった。10個の班に分かれて色々なテーマで話をしたが、世代間交流の重要性が多くのグループで話し合われた。

若い世代の意見を聞いて嬉しかったというのが、今回の夢会議の皆さんの感想であり、こうした機会をもっと増やして欲しいという意見が多かった。

若い世代と高齢者や中間世代の出会いの場や地域活動について学ぶ機会が少ないので、そうした場に半ば強制的に参加してもらえばよいという話も出された。皆が参加する地域の「おとな大学」を企画したらどうかとか、今回のように地域夢会議という名前で、色々な場所で多世代交流の場ができれば良いという意見も出た。一つ印象に残った高校生の言葉として、世代を越えた友達づくりという発言があった。高校生からこういう言葉が聞けたことをとても嬉しく思う。

### ○香山委員

夢会議では、従来型の工業立地では田舎の人口増加は見込めない、やはり西播磨の自然や田舎ならではの良さを生かす社会をつくらうという意見が多く出された。

活用方法として、空き家の活用、子育て支援、介護支援などにおいて行政と市民や町民などがコミュニケーションを図り、年齢、世代を越えた交流を行うことが今後大事になるのではないかなという話が出た。その様な交流が、安全安心社会であるべき高齢化社会において災害の時でも助け合える仕組みになる。学校での避難訓練等を皆で一緒に行うことにより子供たちも自分たちが住んでいる地域を知り、高齢者は子供たちに地域のことも伝える、その事が高齢者には生きる活力に繋がるのではないかな。

このような交流の発展として、産業と仕事で資源を生かした林業や地場産業にもっと目を向けて大切にしたい。農業でも、学校の先生からだけではなく、先輩となるお年寄りが農業科の高校生に興味のあることを密接に教えるようにすれば、子供たちも技術と共に地元に対する愛情が深まっていくと考えている。

また、都会に出て行った若者にインターネットなどを通じて、地域に戻ってこられるように呼びかけをすることで、地域の良さを都会から見直してもらいたい機会になれば良い。

今後広くアピールできれば、田舎でも発展が見込めるのではないか。

### ○太田委員

但馬地域の夢会議では、小学生、高校生、大学生がステージに登壇して夢を語り、その話を受けて参加者全員で色々な夢を語り合った。

今回登壇してくれた小学生7人のうち3人の話が印象に残っている。プロゴルファーをめざし、すでにジュニアの大会で日本一なった豊岡の小学生が、人の3倍練習して、世界一になる夢を叶えると言ってくれた。また、豊岡の演劇団に所属をしながら地元の保育士になり、そこから世界に豊岡と但馬をPRしたいという夢を語ってくれた女の子がいた。さらに、お父さん、おじいちゃんの背中を見て育った工務店を継いで、僕がやらなきゃ誰がやるんだという言葉で締めてくれた香美町の小学生もいた。そんな但馬への熱い思いを小学生に語ってもらい、会場と交流を図った。

高校生、大学生は「好きなことだったら最後まで頑張れる」、「迷うことは良いことだ」、「死ぬまで夢を持ち続けたい」、「大人もきらきら輝いてください」といった発言を通して、小学生に向けつつ、大人にもエール、提言を送った。最後には、ただ参加していると思っていた人にも実は意見の発言機会があるような構成の夢会議となった。

参加者からは、地域や企業として自分たちが子供たちの夢の実現や思いを生かせるよう取り組まなければいけないと感じたとか、子供たちのしっかりとした意見に私たちが頑張らなければと元気をいただいた、但馬の未来は明るいと感じたといった意見が出た。まとめとしては、兵庫県は多様な文化、多様な歴史があり、但馬も非常に多様な人たち、多様な地域がある。恐らくどこのビジョン委員もそのように感じていると思う。夢会議を通し、改めて、多様な人や地域の中でも但馬そのものに愛着と誇りをもっているパワーのある子供たちがいて、それに影響を与える大人たちもいることを感じた。

頭で考える賢いことは行政にさせていただき、我々民間は心に響く、行動を変えていくような活動に結びつけたい。但馬にも色々な良い地域資源、面白い人や才能をもった人がいるが、そんな但馬が一つになれるような起爆剤、きっかけとなるような活動を今後も但馬夢テーブル委員として継続していきたい。

### ○足立委員

兵庫の将来像として、丹波や但馬といった地方が元気になることが大切だと考えている。切り口は少し違うが、人は体に不調を感じると病院へ行く。肩こりは鍼灸院、胃の不調を診るには胃カメラの予約、風邪には抗生剤が処方される。それぞれの治療は大切だが、睡眠、体を休めることが一番大事だと思う。それぞれの手当ては大切だが、一番根元にあるものに手を出さなければいけないという切り口から見たい。

丹波地域においては、少子高齢化、都市部への若者流出、地域が維持・活性化するための基本的な人口と生産年齢人口の減少から、集落、自治会の運営がほぼ限界に達して

いる。

高校生が地域に残るような教育ももちろん大切だが、企業の誘致が必要であると考えられる。丹波地域では丹波市の順位が所得で 1000 番以下と、大変所得が低い状況にある。所得の高い勤務先があれば、大阪東京へ進学している人も戻ってくるし、I ターン者も増えるだろう。

また、全般的な問題だが、少子高齢化、福祉に関連して、ヨーロッパでも、孫の面倒をおじいちゃんとおばあちゃんが見て、高齢者の面倒を子供が見る 3 世代同居のような日本の文化を見習うべきという意見があるとも聞く。資料 3 に (1)「健康長寿で支え合う」の「日常生活における健康づくりの実践」「必要とする人に必要な介護」、また (2)「成長を応援する」の「社会が支え、男女がともに担う出産・子育て」とあるが、これを「男女が担う」から「家族が担う」という方向で対応を考えていければよいのではないか。

#### ○狩野委員

行政順でいけば淡路地域はいつも最後だが、見方を変えると、「トリを取る」「横綱は出番が遅い」といった良い響きが変わってくる。より多くの人たちが、自分たちの地域を今までと違う視点で考えるようになれば、地域は劇的に変わってくる。私の拙い人生経験からではあるが、人はちょっとしたきっかけでも変わっていく。それが善意の行動であればなおさらだと思う。私は無精者なので、気軽にちょっと動いてもらうだけで地域が変わるようなことができないかを常に考えてきた。そして、辿り着いた答えが市町村主導による地域新電力会社の設立である。簡単に言えば、今の関西電力との契約をやめて淡路に電力会社を作り、その契約内容を変更する。淡路は再生可能エネルギーが 28% と進んでいるので、生産、販売、消費を淡路島内で行えば、地産地消のモデル、循環型モデルを完成させることができる。このメリットとして、お金が島外に出ないので、地域でお金が回り、それを行政が行政サービスに回すようになる。小さな地域の小さな変化だが、契約を変えた島民はその変化を見ることができる。例えば無償で LED が灯るとか、町内会の補助金がちょっと上積みされるとか、そういう目に見える効果が期待されるのではないか。

ちょっとしたことだが、そのちょっとしたことがないとなかなか人は動けない。そのためには、私たちビジョン委員を含む地域の活動家が信頼の輪を広げ、「お前の言っていることはよく分からないが、お前の言うことだったらまあやってみようか」と言ってもらおう。それだけだから、人情話とでもいうのか、一人一人が語っていくことが大切だと思う。私たちは淡路環境未来島構想、島民のやる気スイッチをオンにすることを基調としている。小さなスイッチで小さな明かりかもしれないが、そこからすべてが始まると思っている。

### ○三上委員

知事が最初に仰っていたように、夢や希望の具体化を図るポジティブな計画でないといけない。まさにその通りだが、できるかどうかという視点も非常に大事。未来予想図というのは過去からいろいろ描かれてきたが、殆ど当たっていない。その通りになったためしはあまりない。一方、人口予測のようなものは大体その通り推移しているという厳しい現実がある。高齢化の進展、少子化、生産年齢人口の問題といったあまり聞きたくないデータは割と確かである傾向がある。

先ほど各地域ビジョン委員長の意見を聞いて非常に感銘を受けた。地域は非常に多様である。但馬の人とのイントネーションの違い一つとっても、私たちの認識と、地元の方のシビック・プライドというか、地元を見る目線とは違う。その但馬も多様である。兵庫県は五つの国というが、その五つも多様であり、恐らく淡路も多様、播磨はもっと多様かもしれない。そういう多様な中でそれぞれ違う課題に向き合わないといけない。一つは考え方を変えるということで、これは非常に良いと思う。目線を変えれば、地域の良いところ、可能性が見えてくる。地域では既に具体的な取組がなされ、継承されているケースがある。尼崎の町はひったくりの発生件数がワーストワンだが、これを行政、有識者、警察、地域の団体の方々が工夫して、闇雲に防犯や取り締まりを推し進めるといえば直線型でなく、どういう形で問題が発生しているかを細かく柔軟に見ていくことで地域の目線を要警戒地域に置くようにした。例えば、ここにひったくりが発生しますと警戒のチラシを張ることで、周囲の意識が高まり、また悪さをしようとする人たちも、やめておこうかと思ひ直す。声にならないが、意識の通い合いを行き渡らせることで、犯罪件数も結果として抑えることができたという一つの例証だと思う。行政だけでも、警察の取り締まりだけでもだめで、地域の方たちの頑張りにも限界がある。これまで何年取り締まりしてきてもなかなか難しかったと思うが、それをうまく結びつけると思わぬ効果があるということ。大阪市などもこういうことをもっと取り入れてやろうかと思っているだろう。こういうように目線を変えて結び合えば、恐らく色々なことができる。

地産地消という話もあったが、考え方を变えるだけでは解決できない問題もある。少子高齢化の問題に加え、介護などの生活の安心を支える仕組みの担い手が減っていく。それから集落の人口が減っていて、地域の行事も地域の支え合いも維持するのが難しくなりつつある。これは目線を変えるだけではなく、具体的な取組、或いは仕組みを変えるといったもっと大きな、公的な取組が必要で、お金も人も資源もいる。目線の変更と、現実の困難な問題の解決の両方を図らねばならない。

また、格差の問題は深刻である。健康に影響を与える問題もあり、統計の推移を見ても認知症の方の人数は増える。後期高齢者になると要介護度が跳ね上がるという予測はほぼ確かであり、それをどう支えていくか。健康寿命は長野県が一番長く、兵庫県はそれより少し低い、それも1歳程度の差で実はそれほど地域間の格差がないように感じ

る。逆に言うと、それをめざましく改善させていくことは難しいのではないか。

生産年齢人口を拡大しても、皆に経済活動に参加してもらえるかという、必ずしもそうではなく、むしろ生活を支えるための努力は欠かせない。北播磨の方が仰ったが、高齢者は働くというよりも、自己実現を図る、社会との接点をもっと広げていくという発想に変えた方が良いという考えには私も同感である。

困難な課題に後ろ向きにならずに前向きで実現可能な将来像を描くためには、ゆとりをどう創出するかだと思う。担い手も担う力を発揮できる人がいなければならず、絶対的に人の数が減っていく中では、力を発揮できるゆとりのある人が増えていく必要がある。皆が仕事だから忙しいとか家庭で手一杯とか、そういうことになってしまうと結び合いはできない。格差や担い手の不足を解消するために、経済活動でも地域活動でも家庭の中でも、どうゆとりを見出していけるかだと思う。そのためには地域の取組に加え、それを支える公的な大きな取組が必要ではないかと考えている。

外国との交流については、単純労働者を受け入れていない地域で外国の人たちとどう交流するか、人を呼び込むためにどういった工夫ができるかだと思う。

## ○中沢委員

議論を求められている事項に関わることを申し上げたい。

例えば雇用に関する法律では、65歳まで定年を延長させるということが決まったが、中小企業はそんなことは10年以上前からやっている。65歳まで雇用することは当たり前で、今は70歳が定年になっている。技術がある人に残ってもらわないと仕方がないから、残っているのが現実であり、生産年齢人口の概念は現場で既に変わっている。そうしたことは他にも沢山あるので、既成概念で物は考えない方がよい。現在中小企業が困っていることは人手不足である。今は本当に幸せな時代で、私が人事部長ならこんな大学生は雇わないと思う人まで雇ってもらえる。しかし、中小企業の場合は40歳を越えた人間ですら新規採用しているという現実がある。それでも70歳まで勤めれば30年勤続となる。

それと、兵庫県のオンリーワン・ナンバーワンに関する会社の資料を読むと、オリジナルな固有性を持ったところが継続して生き残っている。そこにしかない技術、そこにしかないアイデア、その会社にしかないサービスというオリジナリティを持っている会社が生き残っている。ビッグデータから持ってくるような情報ではなく、自分が情報をつくり出して発信していくという機能が大事である。これは企業だけではなくて地域も同じで、自分の地域が持っている固有の性格や文化をどう発信していくか、地域の持っている固有性をどう育てていくかが地域に求められている。つまり東京や神戸と同じようなものをつくらうとしても必ず敗北する。小さなことを大事にして自分のまちをつくっていくべきである。

技術革新が進む時は地域の変化や年齢の変化を心配するのではなく、地域間の競争が



始まっていることをまず自覚することが大事である。会社でもそうだが、全部が守られる事はないと考えないと競争に敗北する。地域についても不必要になってくる地域が出てくることはやむを得ない。非常に冷たい言い方だが、そこにいつまでも投資をするのは公共財の無駄遣いである。議論すべき事項の中にもあるが、団塊の世代が 80 歳を超えようと 75 歳以上の高齢者が増えようと、実はあまり心配なことではない。それよりも、自分の固有性をどうやって守り育てていくか、それぞれが競争することが問われている。

## ○服部委員

今回の資料では、家族の変容として、単独世帯の問題、生涯未婚率の上昇という大きい二つの点がとりあげられているが、少子化の問題は、働き盛りで今まさに子育てをしている共働き家族の課題・問題、或いは何人の子どもが生まれ、育てられているかという問題が残念ながら欠落している印象があるので加えていただきたい。

夢会議に沢山の若い世代の方が出てこられたことを知って心強く思う次第だが、現在妊娠中であつたり、子育てをしている母親、父親といった当事者の声をあまり今回のビジョンの中で窺い知ることができない。非常に残念であり、ぜひご考慮いただきたい。

構成に関して、資料 3 のⅡ展望策定に向けた検討事項は非常にわかりやすいが、中沢委員の話と絡めて申し上げると、前から中小企業は人手不足で 40 歳でも新規採用をしている。全国的にそうだが、中小企業は女性を、しかも子育て世代並びに子育てを終わった再就職の世代をいかに取り込むかを全国的に課題としている。そういった課題があまりこの資料からは見えてこない。子育てしながら働きたいという希望を持っている層は全国的に確認されており、子育てのサポートがあれば就労したいと言う人は兵庫県下に溢れているのではないか。したがって、この資料 3 のⅡ展望策定に向けた検討事項で、特に 1 の (2) 子育て社会、3 の (4) 働き方が結び合うように検討を進めていただきたい。女性活躍推進法が昨年 4 月から施行され、企業が当事者化されている。行動計画の策定も義務付けられており、公共調達においても女性活躍推進法の行動計画を持つ企業は加点される。そこで、本県のビジョンにおいても、女性という存在、特に現在子どもを抱える家族世代、もう一つ言えば女性だけでなく男性についても、何らかの明確な当事者化、位置づけ、項目化をお願いしたい。

## ○米山委員

2030 年には今生まれた子が 15 歳の多感な年齢になる。そこがあまり見えないと感じる。ビジョン委員の方から、子供たちとの意見交換をしているという話を聞いたが、子どもを出せばいいのではなく、日頃の生活の中で子どもと関わるのが少ないと感じている。

私は地域祖父母モデル事業をやっているが、子供がいない親というより、孫がいない人が多いようである。私が小さい子を連れていると涙を流される人が多いという現状を

みてこのモデル事業を引き受けた。やはり日頃の生活の中でそういう体験のできる場が少ないのだろうと感じている。

人間は知ることによって気づく、気づくことで広がると思うが、それをどうやってビジョン化し、施策化していくかが難しい。服部委員から職場復帰を含めて仕事をしたい親は沢山いるとの話があった。後ろ髪を引かれる思いで職場復帰をする、その親御さんの気持ちを大事にすべきだと思うので、そういう子どもの目線での取組をもっと見える化し、私たちのような普通のおばさんでも見て分かるようなビジョンができれば良い。

### ○能島委員

子育て世代の人たち、現在の子供たちの意見が政策形成プロセスに反映されていくことが重要である。特に、兵庫県の人口動態をみると、自然減に加えて社会減も一つの課題である。子育て世代の人が、兵庫県に住み、子どもをつくり、育てることをどう促進していくかということに対して、当事者がしっかりと意見を出し、政策形成プロセスに入ってくることが非常に大事である。ロジャー・ハートの「参画の梯子」では、子どもや若者が社会参画していくプロセスについて、最初の段階では感想を発表するといった形式的な参画にとどまるが、梯子を登るにつれ、政策形成そのものに子どもや若者がきちんと参画していくことが求められると言われている。

2030年には、現在の10歳から20歳ぐらいの人たちが子育て世代となり、また子供を生む年齢になる。だからこそ現在の10歳から20歳ぐらいの人達がきちんと参画できる場が生まれれば良い。その意味で若者フォーラムの開催は非常に素晴らしい取組だと思う。ただし、単なるイベントではなく、若者が恒常的に政策形成プロセスの中に入っていけるところまで踏み込んでいただくと非常にありがたい。

### ○西山委員

昨日、家に入った地域のスポーツクラブの募集チラシを見たところ、一番上に、お茶当番や役割などの負担はありませんと書いてあった。皆さんには負担がないので安心して加入してくださいというお誘いである。地域活動に参加しない理由はいろいろだが、最も多いのは「忙しい」。さらにその上に当番や役割はご免だという話が背景にある。

二番目は人間関係が面倒だというもので、そのために地域活動への参加を敬遠するという人も多い。こども会でも子どもの参加者と単位数の両方が少なくなっているのも、いろいろな対策を提案するが、同じ内容のものがいろんなところから来るので、これ以上はできない、しかも、上から目線で、と怒られてしまう。

能島委員も言われたが、若者を対象にしたフォーラムと書いてあるのを見て、これからはこれだと思った。とはいえ、行政が人を集めて何かするという形ではなく、地域の若者に任せて、面白いものが出てくればそれを応援するという姿勢で臨んで欲しい。

そうした面白いものが出てきた時に、それをよく見て足を運んで知る、そして地域の

人と繋がっていくことを行政の方にはお願いしたい。これは非常に大切である。地域が主体となって地域活動を進めてほしいと期待しているが現在はそれと反対方向に行っている。地域活動に対する若者の力に期待したい。

#### ○大谷委員

今日の資料の中にはボランティアという単語が殆どなかった。明文化せずともボランティアの存在は組み込まれており、前提にあるということかもしれないが、あえてボランティアの多様性の喪失とコーディネートについて意見を言いたい。

以前あるコープこうべの福祉関連の会議で、組合員から「組合員は潜在的にボランティアである」という言葉が出た。生協はもともと助け合い、支え合いの組織であり、ボランティアの要素を持っているが、この「組合員は潜在的にボランティアである」という言葉の主語である「ボランティア」を「県民」「人」と置き換えても十分に通じる話だと思う。

程度の差はあれ、人は皆困っている人の手助けをしたいと思っている。誰かに何かした時に相手からありがとうと言われれば嬉しいというのも、人間としてごく自然な感情であり、優越感とか上から目線ということではない。したがって、この潜在的なボランティアをもっと表に引っ張り出すためのきっかけづくりや仕組みづくりをしっかりとしていきたい。そうすることで、活動が見えてくるし、それが大事である。

また、その活動をコーディネートする機能や人材が必要である。個人やグループで頑張っている限界がある。その時に専門的な知識やスキルを持ってコーディネートする人がいれば、点で存在している活動が面に繋がっていき、相乗的な効果が現れると思う。コーディネートする人材の発掘と養成を十分に考えていただきたい。

人口が減り、アンバランスな年齢構成になっていく社会では、ボランティアが支えていく部分は大きいと思う。家庭が小さくなり、家庭を持たない人が増えていくと、他人との結びつきの中で生きていくことが非常に重要になるので、私たちの心の中にあるボランティアの精神がぐっと出てくれば、大きな力になると思う。

#### ○平田委員

県の説明を聞き正しいと思ったが、このまま続けていった時に、誰がどうすべきかというイメージを得られるか、取組意欲や協働環境が生まれてくるか、疑問を感じた。

地域ビジョン委員長の言われた話はよく理解できる。西播磨も丹波もその通りであり、それは淡路にも共通している。とはいうものの、実現は難しい。大きな中抜けがある。例えば、産業振興のための産業振興では地域は置き去りにされたままになる。だから、地域の産業振興が地域に向かうという流れをどうやってつくるかが大事になる。そのためには地域からの積上げ算を進める必要がある。地域からの積上げ算を進め、行政が戦略として採用できるところまで持ち上げ、さらにはアクションプログラムにしていくこ

とで、この大きな中抜けを解決するべきである。そうでなければ、常に話がすれ違うことになるのではないか。

#### ○畑委員

3点申し上げたい。一点目は、わかりやすさという話に関連したことである。これまで、各地域のビジョンで実現したものを全県ビジョンに結びつけていく取組を続けてきたが、変化が著しくなり、新しいものを考える時は、ここは大切なポイントの一つになると思う。つくるだけでなく、「続けて進める」「取り組む」という点を再度確認することが重要である。ビジョンが策定された頃は、「県民主役」「地域主導」「ストックの有効活用」が3つの背景として語られていた。最後の「ストックの有効活用」が空き家、人間関係といったところで力を発揮する時期に来たと感じている。

二点目は、様々な人の取組によって進めていくことになるので、いろんな人のライフスタイルを上手く拾って、100年、110年生きるようなライフスタイルのイメージを出してみるのも挑戦的で面白いことだと思う。考えるだけでなく、何かを変えていくことに積極的に取り組む人の活動から何かを学びとることも大事である。質の高い暮らしをどう実現するかが一つの課題になってくる。何もないところからは希望や期待は出せないで、今ある課題或いはこれから起こるかもしれない課題を皆で共有し、そこから先に行くための解決策を生み出すことが重要である。

三点目は、取組の方向性について、各分野の議論もこれから深まり、新たなものが出てくると思うが、統合型の議論ができる場や各分野が融合・統合するような取組を忘れないで欲しい。環境、社会、経済などを横串にとって見ていくことが非常に重要である。ツーリズムを例にとると、仕事としてのツーリズムもあれば、地域の誇りとしての訪れて欲しい場所とか住みやすい場所といった面もある。ツーリズム自身が生み出す新たな課題をどうやって解くかも必ず出てくる議論である。何かを深めようとする他の領域と密接に関係する部分に大きな影響が出てくる。2030年には新たな技術が出てくることを考えると、特にそこは重要になってくる。最終的には、倫理的な観点をどう当てはめていくかも重要である。

#### ○増田委員

私はここ17～18年、食と農と地域、過疎地域の問題に取り組んでいる。結論だけ言うと、一点目は、日本の農業は企業化しないと最早もたない。今の農業農村の姿が60年前ぐらいの日本の小売業の姿とそっくりになってきたと感じており、そのように考えている。

二点目は、日本の農業をより質の高いものに切り換えていく必要がある。私は、有機無農薬の農業を続けているが、自分の中ではもうこれしかない結論付けている。その最大の理由は、今の農業では生物多様性や環境が維持できないという点にある。生物多

様性が実現できる、生物が共生できるという農業に切り換えていかないと、100年も持たないと思っている。

三点目は、企業化する一方で、農業の趣味化や教養化も必要であると考えている。それを通じて農業を全県民の農業にしていけば良い。さらに中山間地、特に過疎地をすべて農業公園化すべきだと思っている。

この3点について、実践を続けているが、この1年は、加西市で10ヘクタールほどの土地を借りて、放棄された土地を畑に戻して、そこで有機無農薬の農業を広める活動を行っている。兵庫県の過疎地を再生するところなるというモデルを加西市でつくりつつある。これを今後数年で形あるものにし、県全体に広めていきたい。

### ○草郷委員

ひと・暮らし研究会では、2030は意外とあっという間に来てしまうだろうという認識に立ち、イメージ倒れにならないような具体的な像を描こうとしている。1回目の研究会では、ビジョンの創造的市民社会という将来像に関連する形で、どういう社会をつくっていくか、2030年がどういう社会になるかを考えることとした。論点としては、いわゆる現役世代、特に子育て中の現役世代の視点が非常に重要であるという意見が出された。また、研究会のメンバーが特に重視したのが若者の教育と雇用である。グローバルなエリートをつくるだけでなく、グローバルな視点を持ってローカルに根差した生き方ができる人を育成する教育やそうした教育を受けた若者がどうやって兵庫で暮らしていくのか、そういう意味での就労が重要であるという論点が出された。

次に多様性の問題も出された。メンバーの中には高齢化問題や障害を持つ人と向き合うことに日夜頑張っている人がいる。その人たちからは多文化共生に加え、多世代がどう繋がっていくのか、多文化と多世代の両方が重要であるという意見が出された。

座長としての意見だが、兵庫県の中で出てきている芽をできるだけうまく拾っていくことになれば、その芽をどうやって広げていくのかということに繋がるのではないかと考えている。

また、2030年と言えば、日本がSDG（持続可能な開発目標）を国際的な社会づくりの目標として掲げている年である。それにふさわしい「世界の中の兵庫」としての視点を持つことができれば良い。

### ○吉本委員

私は団塊の世代の生まれである。2025年問題とよく言われるが、2025年時点では団塊の世代はまだ75歳ぐらいであり、助けがなくとも自分の身の回りは何とかできると思う。2030年になると、団塊の世代が80歳代になる。80歳になると一人では生活できない。したがって、一度2030年問題を真剣に検討する必要がある。団塊の世代は今まで世の中で様々な役割を果たしてきたが、80代になれば支えてもらう側に回ると思う。2040年ま

で団塊の世代に対応できれば、その後は日本も元の社会に戻っていくと思うので、そこをきちんと議論して、どういう社会をつかっていくかを考えていただきたい。

福祉の分野では人手不足の話をよく聞くが、それは福祉の専門家の人手不足である。福祉はイメージが悪いので福祉の世界に入りたくないと言う人が若い人に増えてきている、という話を福祉施設の方から聞くことがある。他にも、子供を育てるのがしんどいから子どもを産みたくないという話もあるが、世の中を支えていくためには福祉のマインドが必要であり、そういう大きな福祉マインドをどのようにしてつかっていくかを社会を挙げて議論しないと、2030年代以降の日本の社会が暗くなっていくと考えている。

先日、植物防疫の優秀団体表彰の際、中山間地では農作物の防疫事業は単独ではできないので共同作業でやっていたところ、その過程で、防疫事業だけでなく営農も共同でやろうという話が出て営農事業に広がっていったという話を聞いた。共同防疫を発端として営農組合をつくり、農家の空き家に人を呼び込む事業を営農組合が開始した。淡路の営農組合の話であり、パソナに農業従事者を育ててもらっているが、去年と、今年とも空き家には3人が入っており、うち3分の2の人が参加している。参加している人のうち、農業の得意な人は農業に、販売が得意な人は東京や大阪へ行って販売活動に従事している。中山間地なので農地は狭いが、一つのことをきっかけに農業を定着させているという話である。農業の世界でも地域に合った事業展開を考えていただければと思う。

### ○岸岡委員

私は団塊の世代だが、これから団塊の世代は地域の邪魔者にならないように、自分のことは自分でやらなければならない。姫路の青山で県民交流広場事業を行っているが、スタッフが上手く交流広場事業を居場所としている。ふれあいサロンの中ではトライやるウィークを8年ほど受け入れてきており、そこで世代を越えた友達が生まれている。子ども一日店長においても、スタッフが子どもたちと友達関係を築いている。県民交流広場はそろそろ終結するようだが、居場所ができてきたことを踏まえ、今後は高齢者が活動しやすい場所をつくる必要がある。

スタッフにひとり暮らしの高齢者や認知症の人を巻き込んでいることも我々の事業の特徴である。認知症の方については、専門家から「ここ2年ほど症状が進行していないのはなぜか」と聞かれることがある。ふれあいサロンでスタッフとして自分の居場所をつくっていると話したら、それは素晴らしいことだと言われる。そうした居場所はできているので、その居場所で高齢者が自己実現できるプログラムをどんどんつくれば良い。

### ○瀬木委員

私は去年の4月までオーストラリアで生活をしていた。妻はオーストラリアの人間であり、1月に日本に移住してきたが、日本に住んだことがなく、子供も日本語をうまく話

せず日本の学校の制度にも馴染んでいないといったなかで、日本の教育環境で育ってこなかった子供が日本で生活することは様々な困難を伴うと感じている。高齢化社会が始まり、人口は必ず減っていく。生産を担い社会の活力になる人の数が減っていく社会においては、外国人の力を活用すべきである。移民政策とも関わるため県のできることは限られているかもしれないが、多様な能力と価値感を持つ人々が集まり、世界を相手にした競争の中で切磋琢磨することが大きな活力を生み出すと思う。

私がオーストラリアで住んでいたメルボルンは、オーストラリアの文化の中心地と考えられている。世界中から来た人々が行政や市民社会の中で非常に大きな位置を占め、様々な分野で活躍している社会だからである。そういう人々が集まることにより、様々な意見、考え方、価値観をオーストラリアに住んでいる人と共有し、それを広げていく、そういうプロセスの中で面白い文化が生まれている。

兵庫県も歴史・文化的背景を見ると、そういう土壌を豊かに持っていると思う。ぜひ日本と異なる文化を持つ人々が兵庫県の中でどう活躍できるか、どう定着させるのか、どのように社会を巻き込んでいくのかを議論していただきたい。

#### ○田中委員

資料に書いてある政策が大学生にきちんと伝わるのか。分かりにくさがある。2030年を凌ぐだけでなく、もう少し先を踏まえていろいろ考えていく必要がある。

2030年時点では、今の大学生はまだ30歳少しと人生3分の1ぐらいのところにいる。資料説明の中で生産年齢を拡大すれば労働人口は変わらないという話があったが、少子化が進むことでどうしようもなくなることもありうると思っている。

夢とは何かと考えた時に、お金持ちになることも一瞬思ったが、住む地域に関係なく、誰もが自分でしっかり選択できることが夢だと思う。この「選択できる」ということについては、選択肢にいろんなものが上がってくるような応援ができれば良い。選択には仕事やパートナーも含まれる。大学生は仕事と言うと就活、パートナーと言うと合コンと考えてしまう。なかなか大学生が身近に感じられてないという点で少しミスマッチが起こっていると思う。ミスマッチとは、パートナーについては離婚、就活については私の周りでも1年も経たず仕事を辞めた人がいる。大学は新卒の応援はするが、途中で就職する時は頼るところがないという声を周りの若者から聞く。また、地域活動をする際に、活動の場があるのに場がないように感じる。これも一つのミスマッチである。中播磨の地域ビジョン委員をやっていたが、会議が平日の夕方だったために会議には1回も行けなかった。実際には様々な活動の場があるが、それが参加できる場になっているかどうかを考えていくことで様々な人を巻き込んだ活動ができる。また、そこではコーディネーターが必要である。

私は県と消費者教育を一緒にやっているが、県立大の職員にその話をしても消費者教育のことを知らない職員も結構いる。県の施策が県の職員に伝わっていないのではない

か。

先ほどの選択肢についてはオリジナリティの発揮が大事である。また、オリジナリティを出しても選択されないものはなくなるしかない。その選択肢を選んでもらうには、大きなことよりも、スモールアクションというか、身近な地域の人たちと話をするような、できることからやっていくという当たり前のことが必要である。

労働に関しては、法律では残業規制があっても中小企業では守られていないとも聞く。当たり前のことを当たり前にやっていく。その中で自分らしい選択ができるようにしっかり応援できれば良い。

### ○堀委員

資料に、兵庫県は消防団員数が全国 1 位と書いてあるが、こうしたビジョンを考える時に、どんな指標で測れば評価できるかということの表れだと思う。例えば消防団員はその地域の姿を表すのではないかと思う。

阪神地域には大学が多数あるので、大学と地域との関わりが重要だと思う。また、阪神地域でスポーツをナンバーワンにしていく必要がある。プロ野球やJリーグを見ると、良いところまでいくが勝てない。それをトップにするための議論があれば良い。兵庫県の魅力はぼんやりしているので、阪神が強い、ヴィッセル神戸が強い、大学であればフットボールが強いといった、兵庫県にはそういうものがあるという魅力を感じられる地域とするために、数字としての目標化が必要である。理念化だけではなかなか難しいのではないか。

以 上